



豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町3-2-1-600
TEL 06-6844-5290～4
FAX 06-6840-8127

平成16年(2004年)3月22日 第6号

研究紀要第131号……

研究紀要第131号をご存じですか。「豊中市小・中学生の生活実態調査 豊中の子ども像Ⅹ」のことです。

社会の変化が激しい今日、子どもたちの生活実態がどのように変化しているのか、あるいは変化していないのかを市立小中学校の協力を得ながら調査をし、結果をまとめ、考察を加えています。

この2年間は、学校5日制のもとで、子どもたちの生活がどのように変化しているのかを調査しています。今年度は子どもの意欲・関心と学習の関係、行動との関係を中心に考察を加えたものとなっています。

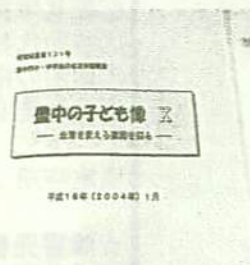
例えば15ページ、問8では「学校での学習のためにあなたが気をつけていることは何ですか」と問うています。さて、回答は何だと思われますか。日頃、多忙な日々を過ごされている教職員の皆様には、ゆっくりとご覧いただく時間をもっていただくことが難しいのかもしれませんが、豊中市の子どもたちの姿が現れているだけに、一度じっくりとご覧いただければと思っています。各校園には複数冊送付していますのでご活用いただければと願っています。

これ以外にも夏期教職員研修会講演概要、ニューステージ・アカデミー研修内容を取りまとめた研究紀要や研究協力員による評価研究をまとめた紀要、理科教育に係る研究双書等も送付しています。

いずれも教職員の方々が研究された内容を紀要としたもので、各校園を支援するため、研究体制を充実させながら日常の授業研究に役立つものや学級運営に役立つことができるようつくっていきたくと考えています。

教育研究所が教育センターとなって1年が経過しようとしています、まだまだ、教育現場のニーズに十分こたえきれていないと思っています。

しかし、子どもたちのために昨日より今日、今日より明日がよりよくなるよう心がけていますので、日頃研究されていることをすべての教職員で共有できるよう積極的な資料提供や発表をお願いします。



今年度、実施した障害児教育に関わる主な研修等について

障害児教育連続研修

目的：障害児教育担当教員の専門性を高め、指導の充実を目指す。

対象：幼小中教員

講座内容：

- ① 肢体不自由児への具体的支援
- ② 聴覚障害児の理解と支援
- ③ 補助代替コミュニケーション手段
- ④ 個別の指導計画の実際
- ⑤ 高機能自閉症、LD、ADHDの理解
＜連続5回＞

実施時期：6月3・5・10・16・20日

★障害児教育担当の経験の少ない方向けの入門編の5回連続研修として実施しました。また、1回ずつの公開講座として広く参加を募り、延べ125名の参加がありました。

次年度も、実施する予定です。（講座内容は現在、検討中です。）

「個別の指導計画」研究会

目的：個別の指導計画の作成を考慮した支援方法について、実習や情報交換を通して研究する。

対象：小中学校教員25名程度

研究会時期・回数：3学期 連続4回

★個に応じた指導の充実が求められています。「特別支援教育」への転換も視野に入れて、「個別の指導計画」についての研究を、今後、より一層深めていく必要があります。今年度の研究成果は、今後、何らかの形でお知らせする予定です。

専門相談員派遣事業

目的：専門相談員を派遣し、各校園の子どもについての悩みや不安、個に応じた指導のあり方等のさまざまな課題について、教育相談を行う。

実施校数：各課題種別5校以上

計25校園

課題種別（派遣専門相談員）：

- ① 発達全般（臨床心理士）
- ② コミュニケーション障害等（言語聴覚士）
- ③ 肢体不自由等（大学教授）
- ④ LD/ADHD等（LD教育士）

派遣回数：各校園いずれか1回

派遣時期（今年度実績）：10月～1月

★今年度、派遣希望を多数いただき、できるだけ調整させていただきましたが、結果的に希望に応えられないことがありました。

派遣させていただいた学校から、「子どもの様子を実際に見てもらい、その上で具体的な助言をいただけた。以後の指導の参考になった。」の感想をいただく等、大変、好評でありました。

次年度も、引き続きこの事業は実施する方向で進めています。課題種別、募集校数、派遣時期についても、できるだけ先生方のニーズに応えられるようにと、現在、検討中です。

（今年度は、別事業で「自閉症・発達障害」の巡回相談を、17校園で実施しました。）

その他の研修

- 「聴覚障害児への支援—補聴器の理解—」 5月実施
- 「自閉症・発達障害支援事業」連続講座（4回） 1学期実施・
実践交流研修 7月実施
- 「ソーシャルスキルトレーニング」 8月実施
- 「手に障害のある児童生徒のリコーダー指導について」 10月実施
- 「ダウン症の子どもへの理解と支援」 11月実施

障害のある子ども一人ひとりの教育的ニーズを把握し、適切な教育的支援を行うことが求められています。次年度も、多数の参加・申込をいただきますようお願いいたします。

タッチ・座・サイエンス 親子理科講座

「星をみつめて」～偶然と奇跡～

関勉先生講演会

本年度親子理科講座は、彗星発見で有名な関勉先生を講師に迎え開催されました。先生は講座の朝、高知龍馬空港を飛び立ち、来豊されました。途中、折からの荒天で飛行機が揺れ、「池谷・関彗星」発見当時のことを思い出されたそうです。

1965年9月18日は日本列島を台風が襲っていました。高知も台風に見舞われ、ようやく夕刻通過しました。雨が上がり、晴れ間がのぞき始め、関先生は、すぐに望遠鏡を準備し、自宅の物干し台にのぼり、彗星を探し始めたそうです。視野の中をいくつもの星が通り過ぎていきました。その中で、視野を動かしていると何か気になる場所があったそうです。よく目をこらしても何もない。「何もない」と視野を先に進めるが気になる。そこで視野を戻す。そんな繰り返しの後、「先ほど見えなかったところに彗星が見えてきたのです。これは、偶然でした」と関先生。

同じころ静岡の池谷さんも同じ思いで、台風の風雨の中、晴れ間を待っていました。でも静岡は、台風の真っ直中でした。しかし、夜空に一瞬の晴れ間が訪れました。台風の目に入ったのです。その機を逃さず、望遠鏡を夜空に向け、この彗星を見つけたそうです。「これは奇跡です。すごい粘りです」と関先生。この時、お二人が発見されたものが「池谷・関彗星」です。この彗星は、このあと、大きな尾をもつ大彗星に成長し、20世紀最大の彗星とよばれています。

関先生は、彗星の搜索を始めて、約10年間、毎日毎日、星を眺め、彗星を探していましたが、発見することはできなかったそうです。その間、他の人が彗星を発見した同じ場所を見ていたにもかかわらず、見つけることができなかったことが、何度となくあったそうです。彗星発見をあきらめようとしたことがあったのですが、再起し、ついに彗星を発見されました。「これまでいつも見続けた空ですから、いつもと少し違うところがあると、見えてくるのですよ」と成果が得られなかった日々培った「眼力」が発見の原動力だったと語られています。偶然をものにできる積み重ねた「努力」、奇跡を呼び起こす「粘り」がこの彗星の発見の裏にはあったのです。この彗星の発見の後、お二人は次々と彗星を発見され、5個ずつになったとき、池谷さんが、体をこわされ、彗星の搜索ができなくなりました。そこで望遠鏡を作ることに専念されました。そのときの第1号レンズ(鏡)をライバルの関先生に贈られたそうです。関先生は、この鏡を見るたびに勇気づけられ、搜索を続け、彗星を発見されました。



池谷さんからの鏡

「これからも毎日、あたりまえのことをあたりまえに続けていくだけです」という先生の言葉の中に、「わずかな変化も見逃さない眼力」、「努力」、「粘り」、そして「すばらしい友情の支え」など、私たちも毎日、大切にしていきたいことを心に感じた講座となりました。

さて、今年5月中旬ころ、明るい彗星(リニア彗星、ニート彗星)がやってきます。夕刻の西の空、双眼鏡があればよく見えるようです。お二人のすばらしい友情や活躍に思いを馳せながら、美しい星空を楽しみたいとなりました。



池谷・関彗星

ほめる？叱る？どっちが得意？

「今週も叱ってばかりでした」「叱るのはよくあるんだけど、ほめてあげるのはなかなか難しくて」こんな言葉を聞くことがよくあります。また、「お母さんは怒りんぼだからいやだ」「今日も先生に叱られた」なんて言っている子どもの姿もよく見ますね。さて、思い出してください。そんなに毎日、子どもを叱ってばかりでしょうか？「ん？そんなことないぞ、ほめてもいるはずなのになあ」なんて方も多いのではないのでしょうか。しかし、子どもの目に映る大人の姿は怒っていることが多いようです。なぜでしょう？

ある大学の先生がおっしゃっていたことなのですが、ほめるときと、叱るときでは、どうやら大人の側の手順が違っていたりすることがあるようです。例えば、A子ちゃんが掃除をしっかりとしていたとします。おそらく、「きれいになったね」「頑張ってるね」などの言葉がA子ちゃんにかけられるでしょう。では、反対にA子ちゃんが掃除をせずに遊んでいたらどうでしょう。「A子ちゃん！今は何の時間ですか！」「A子ちゃん！掃除の時間に遊んだらだめでしょう！」そう言って叱られてしまいますね。“声をかける”という点では同じですが、ほめると叱るでは、その声のかけ方が違っているのです。どこに違いがあるのでしょうか。

1. 子どもの名前を呼んでいるかどうか。

→誰に向かって声をかけているのか。

“僕に”“私に”をはっきり認識できる。

2. 何をしたかが伝わっているかどうか。

→何のことで今、声をかけられているのかが明確にわかる。

3. ほめる、叱る理由が述べられているか。

→自分の行った行為が、なぜ良かったのかを把握できる。

叱る時には、確かに子どもにしっかりと理解してもらおうと上記の3点を特に強調していることが多いのではないのでしょうか。毎日の中で、子どもをほめる時には、こちらの喜びを出来るだけ伝えてあげたいと、“良かったね”ばかりが先行しているのかもしれませんが。その子のどんな行動が、なぜ良かったのか、できるだけ大きな声で伝えてあげられると、なお、良いのかもしれないね。(岩井)

